

平成 24 年 度 学 校 評 価 書

学校名	兵庫教育大学附属幼稚園
-----	-------------

1 学校教育目標

心身ともにたくましい子どもの育成	<input type="radio"/> 健康な体の子ども	<input type="radio"/> よく考えて最後までやりぬく子ども	<input type="radio"/> やさしく豊かな心をもつ子ども
------------------	--------------------------------	--	--------------------------------------

2 本年度の重点目標

(1) 園運営	・園運営が主体的かつ円滑にできるよう、園長のリーダーシップのもと、教員一人一人が明確な目的をもって力を合わせて取り組むよう努める。
(2) 教育研究活動	・幼児一人一人の特性に応じた適切な指導ができるように、キンダーガーデンカウンセラーのアドバイスも参考に教員間で情報を共有し指導にあたる。 ・「うれしのタイム」における幼児の育ちに着目し、子どもの思いを読み取りながら遊びの環境を考えることを通して、研究テーマ「子どもにとって意味ある環境とは」に迫る。
(3) 他校種との連携	・保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施し、より効果的な子育て支援事業を推進する。 ・大学との連携では、大学教員を招聘しての研究活動や親子活動、保育活動を計画的に推進し、日々の保育へつなげるよう努める。

3 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
園運営	○組織運営 ・教員一人一人の主体的な取り組みを促すよう、園長がリーダーシップを発揮し、大学と一体となった園運営を行う。	・園務がスムーズに遂行されているかを教員会議や日々の保育情報交換会の場において点検するとともに、附属学校運営委員会での審議をふまえながら、園長のリーダーシップのもと、大学と一体となった園運営を行った。 ・各教員が自己目標を定め、常に意識して園運営、学級運営に主体的に取り組めるよう、定期的に管理職が個別の面談や指導助言を行った。 ・年度末実施の保護者による「幼稚園教育アンケート」からも、本園の教育や運営に対して、肯定的な評価が得られていた。	A	・今後も園長のリーダーシップのもと、教員会議や保育情報交換会、園内研修等を通して、幼稚園全体で保育の質の高まりや、ともに学び高め合う教師集団を目指し取り組んでいきたい。
	○学年、学級経営 ・目指す各学年や学級の姿に向け、ねらいを明確にし、計画的な環境構成を行う。	・年度当初に、学年経営及び学級経営の方向性や課題を明らかにし、今年度の保育の方針を立てた。学期ごとに振り返り、達成状況や課題をまとめ、方向性を確認しながら保育に取り組んだ。 ・学期ごとの学年・学級経営や、各行事ごとの振り返りなどの反省や評価を、会議等で検討し、教員相互で保育の質を高める努力をした。 ・各週末に学年担当副担任も共に学年打ち合わせの時間を持ち、保育を振り返り、次週の保育の方向性を確認した。 ・朝の打ち合わせ時には、各担任より本日の保育のねらい及び課題を明確にし、学年担当副担任や他学年の教員とも共通理解を図り、保育を行うとともに日々の振り返りを翌日に活かした。	B	・教員相互に保育の質を高めていけるよう個々の保育について語る機会を増やすとともに、互いの保育を見合う機会を定期的に設け他者評価を含め、保育の振り返りを積極的に行う。
	○説明責任 ・日々の保育については降園時の説明及び「学級、学年通信」等で報告し理解を求める。各行事については、取り組みのねらいを明確に知らせ、あわせて事後のアンケートの結果を参考にその成果及び課題を「ふよっこだより」等で公表する。	・「ふよっこだより」を年 20 回発行し、教育方針や園で行われる保育の内容、各行事の主旨・取り組み等を伝え、園の保育や幼児の育ちに保護者の理解が得られるようにした。 ・主な行事ごとに保護者にアンケートを依頼し、保護者の意見や要望をふまえ、行事の成果や課題等を「ふよっこだより」で伝えた。 ・「学年・学級通信」を随時発行し、幼児の遊びや生活の様子を通して、保育のねらい等を伝えてきた。 ・降園時に、各担任から学級の保護者に対して、その日の幼児の姿をもとに、保育のねらいや幼児の育ちを伝える機会をもった。保護者に引き渡す際には、個別にその日の様子を伝えた。 ・園の教育を理解してもらうため、今年度は、全学年の保育参観及び保育参加日を「ふよっこだより」として位置づけ年 7 回設けた。	A	・教育課程に基づく園の教育方針について、園の保育や幼児の姿を通して保護者に十分な理解が得られるように、年間を通して説明していく。 ・保育参観や保育参加は、園の教育を保護者に理解してもらう絶好の機会でもあるため、今後も参観や参加の仕方についての共通理解を図るとともに、事前に保育に対する担任の思いを保護者に伝え、当日も振り返りを行うことを意識的に行っていく。
	○危機管理体制の整備及び施設の拡充 ・「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引き」に基づき、毎月実施の「子ども安全の日」における安全指導への意識付け(避難訓練等)及び施設設備の定期点検とその改善・拡充に取り組む。	・「附属学校園における安全確保及び安全の手引き」を職員に配付し、周知徹底した。 ・今年度から毎月 1 回「子ども安全の日」を設定し、避難訓練や安全指導、遊具や施設の安全点検を行った。 ・避難訓練は、不審者対応、火災、地震を想定し、各学年や幼児の発達に合わせた安全指導の方法や内容を検討し、より細やかな指導ができた。さらには、定期的に避難訓練を位置づけることにより、教師の臨機応変な対応を促すことにつながった。引き渡し訓練や小学校と合同の不審者対応訓練も 1 回ずつ行った。 ・安全点検の結果は、毎回事務室に提出し、速やかに修理、改善を行った。 ・各教員が幼児の怪我や疾病等緊急時の初期対応を適切にできるよう研修したり、心肺蘇生法を消防署員を招いて実地訓練を行ったりした。	A	・避難訓練では、教員が迅速かつ臨機応変に対応することが課題であり、今後も教員の危機管理意識や対応能力の向上のために継続していく必要がある。そのためにも、毎月様々なケースを想定しての避難訓練を継続したい。

4 分野・領域ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
◇園運営については、いずれの評価項目においても、自己評価以上のことが実施できている。 ・今後も大学と一体となった園運営を行ってほしい。
・今後も教員間で連携をとり、共通理解を図りながら取り組んでほしい。
・保護者に「ふよっこだより」を発行したり、日常的に保育終了後、担任より保育や子どもの育ちについて話すなど、十分な取り組みがみられる。今後も継続してほしい。
・毎月「子ども安全の日」を位置づけ、様々な事態を想定して実施していることは高く評価できる。避難時の教員の連絡体制も図式化し、明確にするなど、よく改善されている。保健室の入り口を常に開放し、非常時に対応できるようにしていることも評価できる。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
教育研究活動	<ul style="list-style-type: none"> ○教育活動 <ul style="list-style-type: none"> ・本園の特色ある取り組みである「うれしのタイム」のねらいを明確にし、幼児が学級・学年に応じた活動を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程をもとに、年、月、週の指導計画を作成し、地域の実態や幼児の育ちに即した、意図的、計画的な保育を行うように努めた。 ・園行事においては、担当者の計画のもと、行事の主旨やねらい、取り組みの方向について共通理解し、さらに行事後は振り返りを行い、幼児の育ちにつながる行事の在り方を検討してきた。 ・本園の「うれしのタイム」の伝統や意匠をふまえ、幼児の育ちを支える「うれしのタイム」の在り方と、学年学級の活動や行事等との関連について意識しながら取り組めるよう、機会を捉えて教員で話し合う機会を設けた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・三年間の教育課程をもつ幼稚園として、毎年教育課程を見直しながら三年間の幼児の育ちを見通した保育が行えるよう、各教員間の保育観や子ども観の共有に向けての取り組みを今後も行っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇教育研究活動についての自己評価結果は妥当であり、改善の方策も適切である。 ・3年間の幼児の育ちがはっきりと表れており、しっかりした教育がなされている。
	<ul style="list-style-type: none"> ○幼児理解 <ul style="list-style-type: none"> ・幼児一人一人の特性に応じた指導ができるよう教員同士及びカウンセラーによるアドバイス等を日々の保育情報交換や教員会議等で共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年度当初に前担任より、幼児一人一人の特性や課題等についての引き継ぎを行い、幼児理解や援助の在り方に役立てるとともに、今後の見通しを立てている。日々の保育情報交換会や朝の打ち合わせの中で、全教員が情報を共有することで一貫した教育が行えるようにした。 ・キンダーガーデン・カウンセラーに、各クラス学期に2～3回観察してもらい、個々の幼児に応じた指導方法のアドバイスを受けたり、保護者の相談へつないだりすることで、より個の特性に応じた指導が行えるように努めた。カウンセラーからのアドバイスは、全教員で共有し一貫した姿勢で指導できるようにした。必要に応じて個別の支援計画を作成し、定期的に見直し、次年度に引き継げるようにした。 ・就学に向けて、6月と9月に希望進学先調査を行い、必要に応じて各小学校と連絡を取り合い、日常の幼児の様子を見てもらう機会を設け、進学先のスムーズな決定と進学の適切な受け入れ準備を図った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の幼児に応じた指導を全教員が共通理解し、適切に行っているように、今後も綿密な情報の共有、個に応じた指導の在り方についての共通理解を図っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの環境が常に変化しており、幼児の実態に合った環境作りがなされているなど、教育内容が昨年よりもさらに充実している。
	<ul style="list-style-type: none"> ○研究活動 <ul style="list-style-type: none"> ・本園の子ども像や育てたい方向性を明らかにし、実現に向けて日々の保育の中で遊びの環境を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究テーマ「子どもにとって意味ある環境とはー子どもの思いを読み取りながら遊びの環境を考えるー」にそって、月2回の園内研を行った。初年度であり、教員構成も新規になったため、当初に本園の子ども像や育てたい方向性について明らかにし、共通理解を図った。 ・さらには、「子どもの思いを読み取りながら遊びの環境を考える」のサブテーマに焦点をあて、実践事例をもとに検討した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・研究テーマについては、実践事例を中心に迫っていったが、次年度は実際の保育を互いに見合うことで検証していく機会を設けたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・園内研を月2回実施しているなど着実に研究が進められている。
<ul style="list-style-type: none"> ○子育て支援事業の充実 <ul style="list-style-type: none"> ・保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施し、より効果的な子育て支援事業を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「親育てプログラム」として「子育てひろば」のスタッフ、「誕生会」「親子活動」「にこにこ子育て講座」を実施し、それらの活動を通した保育参加、保育参観を行った。 ・「子育てひろば」への参加がしやすいように、午前保育日に設定し、事前打ち合わせを当日に行ったり、事後の反省を簡単にメモに書いてもらったりして、参加者の負担軽減化を図った。「子育てひろば」後、毎回「だいたいすき」を発行し、在園児や未就園児の保護者へ情報を発信した。 ・月ごとの「誕生会」では、園長・副園長を交えた懇話会を、数回に分けての「弁当参加」では、担任と話す場を設け、子育てを考える機会となるようにした。 ・「ふよっこデー」での保育参加や保育参観を行うとともに、各学年の保育参加として、親子活動の機会を設け、親子が触れ合ったり共に活動したりする場とした。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「子育てひろば」では、保護者への負担が少なく、かつ積極的な参加を促進するように、具体的な活動内容や幼児へのかかわり方等について情報発信をしていくとともに、保護者参加の必要性についても啓発していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者が参加しやすく工夫されているため、参加者も増えている。子育て支援事業の充実に関しては、自己評価以上の十分な達成がなされている。今後、保護者にもう少し考えてもらう場があってもよいのではないかと。 	
地域への貢献	<ul style="list-style-type: none"> ○開かれた幼稚園づくり <ul style="list-style-type: none"> ・地域の未就園児親子参加の「子育てひろば」を年10回実施し、地域、幼稚園、家庭がともに育つ活動を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・未就園児親子参加の「子育てひろば」を、年9回実施した（年10回実施予定のところ、1回はインフルエンザ流行のため中止）。年間の参加登録数は104組であった。前半は「うれしのタイム（在園児や「きっすくらぶ」の保護者が遊んでいる場）」に参加、後半は遊戯室で各クラス単位で在園児や保護者と共に活動する日と、園長による「子育てワンポイント講座」、副園長による「触れ合い遊び」を行う日を設けた。今年度の新しい試みとして、大学院生が企画参加しての「触れ合い遊び」を行った。 ・「子育てひろば」実施の数日前に、幼稚園のホームページで今回の活動内容や準備物等を情報発信し、参加しやすいようにした。 ・県の子育て支援事業「まちの寺子屋師範塾」の活動として、受講生が年5回参加し、未就園児親子や在園児と触れ合って遊ぶ機会を設けた。 ・「子育てひろば」に参加している保護者も気軽に子育ての相談ができるよう、園長、副園長が積極的にかかわるようになった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園のホームページの定期的な更新や内容の充実を図り、地域に向けてより丁寧に情報を発信していきたい。 ・引き続き大学院生の参加を授業と結びつけるなどとして計画し、活動内容の幅を広げ魅力ある活動にしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇地域への貢献についての自己評価は妥当であり、改善の方策も適切である。 ・前年度よりも「子育てひろば」への登録者数が増え、ホームページにも事前に遊びの紹介をするなど、工夫がみられる。次年度に向け、さらにホームページを見やすくする工夫をしたり、更新回数を増やしたりするなど充実させていってほしい。
	<ul style="list-style-type: none"> ○研究発表や公開保育 <ul style="list-style-type: none"> ・年3回の幼年教育研究会を通して、研究の成果を発表し、地域及び社会に貢献する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼年教育研究会は、県内外の国公立幼稚園・保育所教員、大学教員、大学院生等約50名の参加者を会員として年3回行った。延べ190名の参加者を迎えた。 ・第1回（5/30水）と第3回（1/26土）は、公開保育、研究報告、分科会、総括を行った。第2回（8/1水）は、今年度の新しい試みとして夏期休暇中に行い、参加者自らが実践した保育の写真やデータをもとに保育を語る参加型研究会を行った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き年に1回は土曜日（または日曜、祝日）開催とし、地域及び社会に貢献していく機会としたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・土曜日開催を取り入れるなど、多くの参観者に見ていただく工夫をしている。土曜日開催を増やすことの可能性も検討してみてもどうか。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
	<ul style="list-style-type: none"> ○校種間連携 <ul style="list-style-type: none"> ・近隣の高校も含めた他校種との交流は、ねらいを再認識し、活動を見直す中で互恵性のある連携活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・三附属連携推進協議会において、各校種間で連携の重要性を確認し合い、計画的に交流を進めた。中でも「子ども理解部会」では、昨年度より実施している三校園共通の「生活習慣アンケート」の結果を報告し、附属の幼児、児童、生徒の現状を把握する機会となった。 ・附属小学校との交流では、5歳児が5年生と11月に、1年生と3月に交流給食を実施した。1月には2年生が生活科の一環として幼稚園の「うれしのタイム」で遊んだ。5歳児の「わくわくキャンプ」では、小学校の教員と共にカレーを食べたり、スタンプを披露してもらうなど、園児との積極的な交流を行った。 ・附属中学校との交流では、4・5歳児と3年生間で、7月に中学生とペアの幼児が遊び、9月には中学生がペアの園児に手作りの玩具を持参し一緒に遊んだ。5歳児は同じペアの生徒と共に「おやじの会」の方が中学校の畑に植えたさつま芋を掘る活動も経験した。11月には、中学生の合唱の練習を5歳児が見学した。担当者同士が事前に連絡を取り合い、園児の生活の流れを意識しての交流内容、時期を選んで実施することができた。 ・県立社高等学校1年生が「触れ合い育児体験」として、全園児と一緒に遊んだり弁当を食べたりした。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も互恵性のある連携・交流となるように、事前・事後の話し合いを意識して行いたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇他校種との連携についての自己評価は妥当であり、改善の方策も適切である。 ・よく取り組んでいる。校種間連携にはメリットとともにデメリットもあるので、今後も互恵性のある連携をすすめてほしい。
他校種（小・中・高校・大学）との連携	<ul style="list-style-type: none"> ○実地教育(教育実習) <ul style="list-style-type: none"> ・改訂されたテキストを生かし、初等基礎実習が効果的な実習となるよう努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初等基礎実習においては、事前に学生が機会を見つけて園に足を運び、園や幼児とかわり課題意識をもって実習に臨めるように、オリエンテーションを4月と実習が始まる直前の2回行った。 ・実習前に改訂されたテキストを熟読するように促しておき、それを基本に指導講話の内容を具現化させた。 ・教材研究、保育研究、幼児理解等の時間を確保できるように、今年度より指導案の作成はパソコンを使用できるよう環境を整えた。 ・学校サポート体験学習は、行事やその前後の取り組みの様子を経験できるような機会を設け、実施した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・学生が少しでも幼稚園や幼児とかわるチャンスができ、本実習へのスムーズなスタートがきれるように、引き続き幼稚園でのオリエンテーションを早目に実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導案作成時のパソコン使用は、学生にとっても時間短縮になり、教材研究、幼児理解等に時間を費やすことができる。今後とも効果的な実習ができるように努めてほしい。
	<ul style="list-style-type: none"> ○大学との連携 <ul style="list-style-type: none"> ・大学教員を招聘しての年2回の親子活動や年4～6回の保育活動を推進したり、園内研修会に参加、助言を求めたりするなど大学との連携を密にした取り組みを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3・4歳児の親子活動（年1回）、4・5歳児の陶芸活動（各年2回）を大学教員指導のもと実施した。親子活動は、それぞれの年齢や発達に合った内容で、親子の触れ合いの機会となった。陶芸活動は、ここ数年大学キャンパスでの活動が継続されており、本格的な陶芸体験ができた。また、大学キャンパスでの活動が有意義な経験となるよう、大学構内散策や園長の授業参観に加え、今年度は大学の食堂で昼食をとる機会も設けた。 ・PTA との共催で年3回実施した「ここにこ子育て講座」では、大学教員による講義やピアノ演奏を聞く機会を得た。 ・大学幼年教育コース教員には、幼年教育研究会のコーディネーターや指導助言者として参加を得た。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・大学教員には本園の保育の資質向上や研究推進のために、定期的な「保育を見学交流会」や園内研究会への積極的な参加を依頼し、指導助言を求めたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の附属という利点を活かし、さらに連携をとり、より充実した取り組みを行ってほしい。